アルケイアー記録・情報・歴史
第一四号 二〇一九年二月 八三―一二六頁
南山アーカイブズ

「Klassenrundbrief des Weiheskurses 1950」

一九五〇年司祭叙階同期生ニュースレターに見られる
南山大学第三代学長ヨハネス・ヒルシュマイヤー師の
宣教師精神と人間性について

リチャード・ジツプル

南山大学名誉教授

Johannes Hirschmeier's Self-understanding as a Missionary
as Described in the Newsletters of the
St. Augustin Ordination Class of 1950

Nanzan University Professor Emeritus

Richard SZIPPL

Archeia: Documents, Information and History
No.14 November, 2019 pp.83-126
Nanzan Archives

初めに

I 日本への派遣・日本語学習・アメリカ留学

来日と日本語学習

専門勉強の任命とアメリカ留学

学生生活、司牧活動

博士課程の修了

II 南山大学学長着任までの活動

南山大学での教育活動と宗教活動

南山大学と神言会

大学紛争

III 学長着任とその後の活動について

学長方針、宗教文化研究所、ロゴスセンター

司祭叙階二五周年記念

神言会の活動

多忙な日課と健康状態

結び

[Klassenrundbrief des Wehrekurses 1950]

一九五〇年司祭叙階同期生ニュースレターに見られる
南山大学第三代学長ヨハネス・ヒルシュマイヤー師の
宣教師精神と人間性について

リチャード・ジップル

初めに

二〇一〇年～二〇一三年、筆者は南山大学社会倫理研究所と南山学園史料室の企画であった「『ヒルシュマイヤー著作集』編纂プロジェクト」の委員としてヒルシュマイヤー師のドイツ語の著作と南山学園史料室の収蔵にあるヒルシュマイヤー師関係のドイツ語の史料を調査することに当たった。その調査の結果、著書や学術雑誌に記載されているいくつかのドイツ語と英語の原稿の他に、ドイツ語に翻訳された九本の英語の原稿（講演や論文・エッセー）数本の他の著書や雑誌で既刊された論文とエッセーと合わせて出版されたものもあれば、その他のヒルシュマイヤー師関係史料としては、ドイツの出版社・テレビ放送局・研究者等との往復手紙、講師依頼等の大学業務関

係の往復手紙、ドイツ語または英語の講義や説教の草稿、そして友人・親戚・神学生時代の同級生に宛てた手紙があることがわかった。³⁾

このヒルシュマイヤー師関係史料の中に特に興味深い二種類の文書がある。第一には、友人と親戚に宛てたドイツ語のタイプ一打ちA4用紙二七枚の手紙の形で書かれたものである。普通の手紙と違って、「10 000 Meilen der Some entgegen (太陽に向かって万里の旅)」という表題もあり、一九五二年四月一八日にドイツを出発してから一九五二年六月二一日に日本に到着するまでの間の *Reisebericht* (旅行談) として、ヒルシュマイヤー師の旅行の準備と出発、オーストリア・イタリアまでの旅、そしてスエズ運河・シンガポール・香港・マニラを経由での日本までの船旅についての記述である。⁴⁾ 昨年、南山アーカイブズの『アルケイアー記録・情報・歴史』第十三号には、この旅行談をテーマにした筆者の論文が掲載された。⁵⁾

第二には、一九五〇年八月にドイツ・ザンクトアウグステイーンの神言会の大神学校で共に司祭叙階を受けた三〇名の同期生の約三〇年間分のニュースレターである。毎年各自の同期生から寄せられた近況報告は一人の同期生が抜粋してまとめたものであるが、ほとんど毎年のニュースレターにヒルシュマイヤー師が日本での活動やアメリカで留学中の活動について書いた近況報告が掲載されている。⁶⁾ このニュースレターは、修道会の上長に提出する活動報告書ではなく、世界各地に散らばっている同期生同士で情報や近況報告を交換しながら交流と友情を深めることを目的とするのであったので、各自のそれぞれの活動を紹介しながら、成功と失敗、喜びと困難を分かち合うような内容が多い。

そういうわけで、これらの文書は、上述の記念著作集でヒルシュマイヤー師の日本経営史の学者と大学の教育者としての活動についての再評価とは別の側面から、すなわち聖職者・宣教師としての側面からヒルシュマイヤー師

を考慮することによってその業績についてより全体的な像を示す手助けになると思われる。昨年の論文では、上述のヒルシュマイヤー師の日本への旅行談の内容を紹介しながら、日本で宣教活動を目指していた一人の若い宣教師としてのヒルシュマイヤー師が抱いていた精神と抱負を明らかにした。それに続いて、本稿では、一九五〇年司祭叙階同期生のニュースレターにおけるヒルシュマイヤー師のおよそ三〇年間の活動についての報告の内容を紹介しながら、特に同師の宣教師としての自覚と同時にその人間性も明確にし、ヒルシュマイヤー師の全体像を肉付けしていくと思う。本稿ではヒルシュマイヤー師の活動を三つの時期に分けて、第一には、日本への派遣、日本語学習とアメリカ留学の時の活動、第二には、再来日から南山大学学長になるまで南山大学での教育活動、そして第三には、南山大学学長になってからの活動を中心にについて考えることにしたい。

I 日本への派遣・日本語学習・アメリカ留学

同期生ニュースレター第一号が発行されたのは、一九五一年七月であった。冒頭の言葉で同期生の一人であったハインリッヒ・ドレンケルフォルト師 (Heinrich Drenkefort) が書いているよう、これから同期生から送ってきた近況報告をまとめ、三〇年間毎年発行する予定であった。印刷と郵送の作業はドレンケルフォルト師の親戚の協力を得てすることになっていた。²⁾ 南山アーカイブズにニュースレターの第一号から第三二号まで（第一一号と第二二号が欠けている）揃っているのです、このニュースレターはヒルシュマイヤー師にとって同期生との連絡を取り続けるために貴重なものであったと言えるであろう。

ヒルシュマイヤー師についての最初の近況情報は、一九五一年一二月発行のニュースレターの第二号に掲載され

ていた。英語学習のためにロンドンに着いたばかりの彼の熱心について、ニュースレターの編集長が次のようにコメントしていた。「同期生のみなさんは、ヒルシユマイヤー師のエネルギーをきつと想像することができるでしょう。シュレーゲル師がヒルシユマイヤー師をロンドンの駅まで迎えに行つてドイツ語で挨拶したら、ヒルシユマイヤー師は『We will speak English, please.』と答えたそうです。⁽⁸⁾」

来日と日本語学習

ヒルシユマイヤー師が一九五二年七月に来日後の最初の近況報告は、一九五三年七月発行のニュースレター第五号に掲載された。ここにまずヒルシユマイヤー師が一九五二年のクリスマスに送った手紙の内容が紹介された。一九五二年七月に来日したばかりのヒルシユマイヤー師は、九月から東京で正式の日本語学習を始める前に数週間を多治見の神言修道院に滞在して、独習の形で初めて日本語や日本の文化に触れた経験について述べている。「只今日本管区の中心的な修道院で日本語のいろはを「近くから」触れようとしています。(中略) 聖務日課を唱えるにあたり、小さな苦行として『正座』をすることにしました。これは決して楽ではなかったが、今、黙想するためには一番いい姿勢になりました。⁽⁹⁾」また、同ニュースレターに掲載されていたヒルシユマイヤー師の一九五三年二月一四日付の手紙の内容から日本語学習の難しさに悩んでいる様子がかがえる。「同期生の皆さんがすでに様々な任務を果たしているというニュースを読んだとき、自分は取るに足りないものだと思います。まだ『学生』だからだ。(中略) 日本語の学習がカタツムリのように緩慢に進んでいる。⁽¹⁰⁾」

一九五四年の夏のニュースレターの報告の中にも、日本語の難しさについての嘆きが続く。「今回、私としては英雄叙事詩を書くことができず、ただいわば小学校の第二学年を無事終えたに過ぎません。小学生だった時と同様

に、『お母さん、今読めるようになったよ』と言えます。(中略) 日本語の手紙を書くこととすると、返事の中に恥ずかしくて顔を赤らめるほどのお世辞を言われます。しかし、自分の手紙はすべて鶏が砂にひっかいているようなものです。¹¹⁾ 実際は、ヒルシュマイヤー師は大学の授業をはじめ、外部での講演会や挨拶が上手で日本語が達者だという評判であったが、それは日本語学習で苦勞した彼の根気強い努力の成果であったと言えるであろう。

ヒルシュマイヤー師は「アルベルト・ハイム」という吉祥寺にある神言会の修道院に住み、そこから六本木にあるフランシスコ会が外国人宣教師の日本語学習のために設置した日本語学校に通っていた。学校までは四五分ぐらいであったので、それほど時間がかからなかったが、通勤ラッシュの電車はいつも込み合っていたことに悩んでいたようである。「ここで、車掌さんがそこから人を押し込んで、最後の一〇人の乗客が詰め込んで乗れるように助けてくれます。塩漬けニシンの樽は比べ物にならないほどです。」¹²⁾

ヒルシュマイヤー師は日本語の学習の傍ら、先輩の宣教師たちから日本の事情を教えてもらったり、東京の吉祥寺教会で働いている宣教師たちの手伝いもしたりしていた。「教会では少し『仕事』ができるようになりました。すなわち、洗礼志願者の勉強会で二分ないし五分の短い講話をすることができました。正直のところ、志願者たちは英雄的な寛大さで聞いてくださいました。(中略) 私たち三人の新来日の宣教師はのんきな日本語学習の他に、日本の宣教活動にもなれつつあります。クリスマスに日本の北部にある柴田の小さな教会に行きましたし、私たちが『アルベルト・ハイム』には東京で用事のある神言会会員が一泊・二泊することが多いので日本の宣教についていろいろのこと聞いています。¹³⁾」

また、来日間もなくの一九五年の八月、ヒルシュマイヤー師は神言会が北日本で担当していた教会へ手伝いに行った。任務は毎日ラテン語でミサをささげることだけであったが、教会の信者さんたちと賄いさんとの会話ができ

なくて困っていたようであった。「自分の周りに何かがあった時に、いつも『はい』と言いながら、日本人のように笑っただけでした。(中略) それにもかかわらず、この最初の四週間の『実践』は、なんでも新しいことだったから、非常に興味深かったです。」⁽¹⁴⁾ 日本語能力が上達したら、教会での活動が少しやすくなったようであるが、同様な熱意が翌年の一九五四年のニューズレターの近況報告からうかがえる。「去年から語学学習の傍ら、私たちの教会に通う約六〇人の信者の『司牧者』として独力で司牧活動も少しできるようになりました。毎日の説教と数回の勉強会を行っています。」⁽¹⁵⁾

専門勉強の任命とアメリカ留学

一九五二年の来日の時点ではヒルシュマイヤー師の日本での派遣先は未定であった。神言会の主な活動は東京、秋田、名古屋などの小教区における信徒の司牧と南山学園における学校教育という二つの分野であったが、ヒルシュマイヤー師は、一九五三年のニューズレターの中に述べているように、自分としては小教区での活動を希望していた。「私と同時期に来日したほかの二人は神言会総本部の計画では南山学園で働くことが予想されていますが、最終的な任命権は日本管区の管区長が保留しています。三人のうち、私が小教区に派遣される可能性が一番高いと思います。私は、『聖なる中立』が許す限り、全力でその方向で準備しています。」⁽¹⁶⁾

ところが、ヒルシュマイヤー師は希望通りにならず、将来、南山大学で働くために専門勉強するように任命を受けました。一九五四年のニューズレターの近況報告の中に、ヒルシュマイヤー師がアメリカで経済学を勉強することになったと述べ、日本語を忘れるのではないかと心配していたようである。「とにかく、この二年間の努力がアメリカにいる間、私の穴だらけの記憶から消えてしまわないことを願っています。私は日本が本当に好きになった

から、あまりにも早い出発は私にとって本当につらいです。」¹⁷⁾しかし、同時に、ヒルシュマイヤー師は、自分の好き嫌いは別として、日本の宣教活動としての教育活動の大切さを認めた。「学校は全能であり、教育はすべてです。より良い店で店員や中堅企業の社員になるために、大学で数年間の勉強が必要です。とにかく求職者があまりにも多すぎるので、もっともレベルの高い教育を受けている人が採用されます。(中略)このような状況からわかるように、私たちの宣教活動は大きな教育事業がなければ、やっていけないのです。」¹⁸⁾

南山アーカイブズに所蔵されているヒルシュマイヤー師関係史料の中に、一九五〇年司祭叙階同期生ニューズレターの他、同師が友人に宛てたドイツ語タイプ打ちA4用紙四枚の手紙二通もある。一つ目は一九五五年九月一日付で米国ワシントンにあるカトリック大学の経済学修士課程の勉強と学生生活についてであり、二つ目は五六年六月二七日付で、米国ボストンにあるハーバード大学の経済学博士課程の勉強と学生生活についてであるが、両方は同期生ではなく、友人と知人を対象にしているものである。

一つ目の手紙の中に、ヒルシュマイヤー師はアメリカへ派遣された理由について説明しながら、自分としては、教育活動よりも、小教区での宣教司牧活動の方を希望していたと述べている。「日本に派遣された新宣教師は、まず二年間の徹底的な日本語学習を終えて、(中略)二年目の終わりごろ、上長は新宣教師の希望が大体わかり、新宣教師は小教区か、名古屋の南山大学か、そのどちらかに任命されます。私は日本の北部の小さい教会の主任司祭や東京の大きな教会の助任司祭を夢見ていたが、残念ながら……。数年前に『教壇に立つのは、一番やりたくないことだ』と自分に言っていたが、ちょうどそれが私の任命となっていました。」¹⁹⁾

ヒルシュマイヤー師は、ドイツの大神学院で普通の聖職者コースを修了しただけで、経済学という専門勉強を始めるにあたって、最初から基本的なところから学ばなければならなかっただけでなく、アメリカの教育システム

やアメリカの生活に慣れるまで多少不安であったようである。ワシントンのカトリック大学での勉強については次のように述べている。「私は経済学のことには少しも知らないにもかかわらず、いきなり『大学院生』で始まり、あえて『上級経済理論』という授業をとるようになりました。私が耐え抜くためには、どれだけ苦勞しなければならなかったかはわかりでしょう。初めてですから、様々な授業を取らなければなりません。全部で一五単位の遅れを取り戻さなければならぬので、今学期は六単位分を履修しているが、来学期もこのようなぎつしりした時間割りで行けば、そして夏学期にも授業を取れば、来年の秋学期で修士課程のすべての単位を取得できるでしょう。それから、修士論文だけが残るが、博士課程へ進めれば、それは来学年中に書いてもいいです。私はこんなに圧力を掛けられても決して屈服しない。学問のつらさはどこも同じだからです。」⁽²⁰⁾このようにして、経済学の専門勉強はヒルシュマイヤー師の第一希望ではなかったが、取り組み姿勢は決して中途半端なものではなかった。

しかし、勉強が必ずしもうまく行ったわけではなかった。ヒルシュマイヤー師は、勉強が忙しかっただけではなく、健康の問題もあった。「第二学期に修士論文を書き始めて七月に完成できるようにしたかったが、神様は私の計画をつぶしてしまいました。というのは、復活祭に、ザンクトアウグスティン大神学校の時代と同じような眼の感染症にかかり、五週間も勉強ができなくなったからです。幸いに、授業は全部無事に出席することができ、試験の前までによくだったので、試験も受けることができました。」⁽²¹⁾

同じニュースレターの中に今後の勉強計画についての報告も記載されていたが、これらの記述はヒルシュマイヤー師が六月九日に書かれた手紙によるものである。興味深いのは、ハーバード大学の夏季講座を楽しむにしていながら、病気の経験も記憶に新しくなかったせいも、将来は必ずしも計画通りに進むようなものではないということにも触れている。「七月と八月はボストンに行つて、ハーバード大学の夏季講座に参加することになりました。かの有

名なハーバードはどのようなところか、楽しみにしています。(アデナウアー首相は今後数日にそこで名誉博士号を授与されるそうです。)こちらでの勉強は九月からまた始まりますが、すべてがうまく行けば、二年間で博士課程を終了できるでしょう。しかし、私が調子に乗りすぎるとき、あるいは勉強にあまり夢中になりすぎるとき、神様は『治療薬』を出してくださいますので、将来のことを細かく計画することは意味がありません。⁽²³⁾」

実は、ヒルシュマイヤー師は、留学の途中でカトリック大学からハーバード大学の博士課程に移ることになり、一九五五年九月にボストンに引越した。⁽²³⁾その理由については記述がありませんが、前述のハーバード大学の夏季講座がきっかけとなったと思われる。それはともかくとして、一九五六年七月の同期生ニューズレターに掲載された、一九五六年七月一日にボストンから送った近況報告によれば、同師の勉強は順調に進んでいた。「私の勉強は予定通りに進んでおり「やっと」修了に近づいています。すなわち、必修科目を終えたが、残っているのは必修以外の科目と博士課程の試験、いわば『最後の審判』の準備です。それから、博士論文がありますが、どの分野でどのテーマにしたらいいか、またアメリカで書くべきなのか、日本で書くべきなのかは、まだよくわかりません。天気ももう少し涼しくなったら、もっと詳しく考えなければなりません。⁽²³⁾」

ここで言う「博士課程の試験」は、アメリカの大学院の制度に従ってすべての必須科目の単位を取得したあとに課せられる総合試験のことである。試験の範囲はその過程で学んだ幅広い包括的なものである。準備はかなり時間がかかり、合格も難しい。特にハーバード大学の総合試験が難しく、不合格者も少なくない。試験勉強の苦労や不安については、ヒルシュマイヤー師は次のように述べている。「最初の数週間は、足もとが少し揺れていましたが、今はもう大丈夫です。努力した結果、ちょうどいいところまで到達することができました。しかし、それにもかかわらず博士課程の試験で追い出される可能性があります。去年の試験では、九人の候補者の中、

五人も落ちてしまいました。その後、少し良くなっているようであるが、経済学の候補者の四分の一ぐらいは落ちてしまっていると思います。それは、私にとって決して励ましになりませんし、まさか『優秀』な成績を取ることがむりでしょう。⁽²⁵⁾」

学生生活、司牧活動

ワシントンのカトリック大学に留学していたときの近況報告の中に、ヒルシュマイヤー師はカトリック大学と神言会の共同体の様子、そしてアメリカの社会一般についての感想を述べています。カトリック大学で特に目立ったのは、司祭や修道士・修道女も多く、カトリック的な雰囲気であった。「学生の中に司祭と修道女がおり、アメリカのカトリック系の大学で教えるために必要な学位を取得することを目指しています。その他の学生はほとんどみなカトリック信徒である。(中略) 大学が位置するこの区域は、小さなローマのようなものであり、あらゆる色や形の修道服を着ている修道女と司祭の姿が見えます。」⁽²⁶⁾

ワシントンの神言会の共同体も多様性と国際性に富んでいて、ヒルシュマイヤー師にとって、自分の勉強に神言会会員としての生活にも大きな刺激であったようである。「我々神言会は他の修道会と同様に大学の近くに十人ぐらゐの会員が宿泊できる共同体があります。去年の共同体のメンバーたちはあらゆる国民と宣教地からなる『小規模な形の国連』のようなもので、会員が皆同じ精神と同じ目的を持っていました。会員たちは皆それぞれの専門分野の勉強に熱心でしたので、非常に興味深い話し合いができて、私たちは本当に身も心も一つとなりました。」⁽²⁷⁾

ヒルシュマイヤー師はアメリカに留学していた間、大学生活だけではなく、アメリカのカトリック教会の様子やアメリカの社会一般についてもいろいろの感想を述べている。ここで、ヒルシュマイヤー師が司祭としての司牧活

動の時に体験した黒人への人種差別の問題とカトリックとプロテスタントの対立の問題について紹介したい。

まず、人種間の関係で目立ったのは貧富の差の問題と社会生活における人種差別であった。これについて友人への手紙の中に次のように述べています。「黒人の家族が引越してくるころでは、地価がすぐ急落して、白人は出ていき始めます。それは人種差別だけの問題ではなく、黒人は自分の家をきちんと整理整頓できないからです。街路は汚くて、家屋は朽果てています。一つの例として挙げられるのは、ニューヨークの南に位置する、水浴場で有名なアズバリー・パークです。ここに神言会が担当している黒人教会があり、わたしが夏休みに二週間教会の手伝いをしましたが、鉄道線路が分離線となっています。片側にきれいで裕福な家と立派な商店が並んでおり、反対側は、まるで全く別の国のような風景です。黒人はドアの前にしゃがんで座って、大きな声でしゃべっていて、どこも汚いです。これは彼らが大変貧乏であることが原因でしょうか、それとも先祖代々のものでしょうか。」²⁸⁾

この記述の中に、当時のアメリカの白人の間で一般的に広まっていた、黒人の貧困の問題が先天的怠惰な性格によるものであるというステレオタイプが見られます。しかし、ヒルシュマイヤー師は同じ手紙の別の箇所で、人種差別による不正について例を挙げながら批判している。それは、ヒルシュマイヤー師がミサの手伝いに行っていたワシントンの近くにある軍基地でのミサの後で起きたことです。「ミサの後で、少佐でもあった従軍司祭は、手伝いに来ていた私たち司祭と一緒に昼食を食べによく行く習慣がありました。今回私の代わりに黒人の司祭が一緒でした。いつものように昼食に行こうとしたら、レストランに入る前に、ウエートレスが出てきて「黒人は入ることができない」と言いました。仕方がなかったですが、全部で司祭五人はみなそのまま帰ることを余儀なくされました。これはワシントンから数マイルしか離れていないところでしたが、ワシントンではこのような態度は厳しく非難されます。この差別の問題を解決するためには長時間がかかるでしょう。こうして先祖の罪の報いは子孫に

も問われるのです。」²⁹⁾

「黒人と白人の人種間の問題ほど深刻ではなかったが、その当時のアメリカではカトリックとプロテスタントとの間にある程度までの対立の問題もあった。信徒数においては、カトリックが少数であり、カトリックの信徒の中に移民の一世・二世が多くて、経済界・政治界・学界などでまだあまり社会進出していなかった時代であった。また、カトリックと他の宗派・宗教との接近を積極的に強調した二バチカン公会議の前の時代には、カトリックとプロテスタントの信徒は互いに警戒していたので、ヒルシュマイヤー師のようにカトリック司祭がハーバード大学で勉強することは例外であった。ヒルシュマイヤー師自身はこの問題を気にしていたが、教員や学生がほとんどプロテスタント信徒であったにもかかわらず、良好な関係を築くことができた。「実は、ハーバード大学はリベラルであり、すべてにおいて、たとえカトリック司祭に対しても寛容的です。ここ『異教徒』の中に入っているいろいろ覚悟をしていましたが、うれしい驚きを感じました。私が経験したのは、学生たちと教授たちの間に素晴らしい仲間意識と親切心ばかりでした。学生たちは大部分既婚で、私よりも年が上ですが、私を仲間として最初から温かく受け入れてくれました。」³⁰⁾

しかし、ヒルシュマイヤー師にとって、学生との関係は単なる学生同士の交流だけではなかった。一九五五年のクリスマスにヒルシュマイヤー師は数名の学友を招待して簡単なクリスマス会を開いたが、その様子についての報告から同師の司祭としての意識が浮き彫りになっている。「お客さんたちはほとんどみなプロテスタント教徒であったが、そのなかにヒンズー教徒も仏教徒も、またその他の異教徒もいて、皆まじめに聞いていました。多分カトリック司祭の話聞くのはこれが初めての人ばかりだったでしょう。もちろん、誰も改宗させなかったが、学生生活の忙しさのためそれは到底できません。しかし、一人のカトリック司祭との個人的な関係を通してある程度先の

入観をなくすことができたかもしれません。」¹⁹⁾

ヒルシュマイヤー師は、一九五五年の夏にハーバード大学の夏季講座を受講していた間、ボストン市内の教会で日曜日のミサの手伝いもすることができた。集中勉強で忙しかった彼にとつて、ある意味で気分転換でもあり、アメリカのカトリック教会を知るよい機会でもあった。「一日中、本の前に座っていると、一般の人々の日常生活をあまり認識できません。毎日曜日定期的に軍基地で告解と二回のミサの手伝いをしていたが、今年の夏初めて本当の小教区の生活に接する機会がありました。ハーバード大学の夏季講座を受講するためにボストンに二カ月滞在しましたが、土曜日と日曜日に一五〇〇〇人の信徒もいる小教区で手伝いをすることができた。ボストンはかつてほとんどプロテスタントの信徒ばかりでしたが、今は人口が二〇〇万人に増えて、八〇パーセントまでカトリック信徒です。(中略) アメリカのカトリック教会は活発的で前進しています。」²⁰⁾

また、ヒルシュマイヤー師がボストンに移つてから、定期的日曜日のミサの手伝いをすることにしていた。アイランド人移民の他に、フランス(カナダ)系、イタリア系、ポーランド系、ドイツ系などのアメリカ人のためにそれぞれ教会が建てられたが、ヒルシュマイヤー師はイタリア系の小教区でミサなどの手伝いをするようになった。同師はドイツ人にもかかわらず、信徒との関係もかなり親しくなったことは知人への手紙の記述からわかる。「私が手伝いをしている教会でイタリア人の名前を読み上げることによって、強い『イタリア語風のなまり』を身につけてしまったようです。人から『イタリア人ですか』といわれることが多いですが、残念ながらその期待を裏切らなければなりません。イタリア人の影響は自分の家族関係にまで及んでいます。というのは、五月に姪の一人(アメリカに住んでいる唯一人の姪)のイタリア系の人との結婚式の司式を行い、イタリア人らしい熱情で親戚の一人として受け入れられたからです。」²¹⁾

博士課程の修了

一九五七年三月、ヒルシュマイヤー師は博士課程の総合試験に合格したので、残っていた課題として博士論文の執筆だけであった。同年の七月に日本へ戻る準備を始めたが、ニュースレターで、博士論文の進め方について次のように述べた。「次の引越しの準備、すなわち、日本へ戻る準備をしています。必須の単位をすべて取得して、三月に博士課程の総合試験に合格しましたので、一応ハーバード大学での勉強が終わりました。その後、博士論文の執筆に取り組んでいます。もちろんそれほど進んでいません。日本の資料に基づくテーマを選びましたので、日本へ戻る許可ももらいました。これは、資料を調べることを通じて私が日本語をスラスラと読むようになると同時に、日本の経済史の必要な知識を見に付けることができるという利点があります。そして、この知識は将来南山大学の活動で役立てることもできます。」

ところが、博士論文の作成は計画通りに進まなかった。前述したように、ヒルシュマイヤー師は、ワシントン留学中に目の病気にかかったが、日本へ戻ったら、再発してしまったので、勉強が一時的にできなかつた。一九五八年の七月のニュースレターに掲載されたヒルシュマイヤー師の報告の中に次のように述べている。「論文はあまり進んでいません。今年は二か月ぐらいいちちゃんと取り組むことができたが、後は目の病気のため不可能でした。今は、調子が良くなりましたが、天気がもう少し涼しくなつてから全力で作業を再開するつもりです。完成は多分丸一年かかるでしょう。」

ニュースレターの第一一号は、南山アルカイブズに所蔵されていないので、ヒルシュマイヤー師の博士論文の研究や執筆については情報がないが、一九六〇年七月付の第十二号に掲載された、同年六月二〇日にドイツの旅の途中で書かれたヒルシュマイヤー師の近況報告によれば、結局論文を完成して、そして審査を合格したのは、

一九六〇年の春であった。「ハーバード大学で博士課程は無事修了することができ、そのあとボストンの知り合いと大変親しくなった友人との送別会がありました。(中略)五月二日にザンクトアウグスティンに着きましたが、八月一六日に日本へ戻り、秋学期から授業を担当することになりました。もちろん日本語で。それは非常に骨折れますが、少なくとも最初は誰か助けてくれる人を雇うことができるでしょう。」⁽³⁶⁾これでヒルシュマイヤー師の三日の来日となりました(一九五二年に日本へ、一九五四年にアメリカへ、一九五七年に日本へ、一九五九年アメリカ、一九六〇年にドイツ経由で日本へ)。⁽³⁷⁾

博士論文を完成して審査を無事合格して日本に戻ったヒルシュマイヤー師は、博士論文をアメリカでも日本でも出版に向けて研究を続けた。一九六一年の同期生のニュースレターで述べているように「大切なのは、研究を続け、論文を発表することです。今論文の原稿を書いているところです。博士論文は少し手を入れてからでないと単行本として出版できませんが、ハーバード大学で出版すると、費用がかりません。」⁽³⁸⁾博士論文の出版については、ニュースレターの中に触れていませんが、英語版は一九六四年に、日本語版は一九六五年に出版された。⁽³⁹⁾

II 南山大学学長着任までの活動

ヒルシュマイヤー師が南山大学に赴任した一九六〇年九月以後、ニュースレターに記載された近況報告は、大学の発展と本人の大学での活動と共に大学における神言会の宗教活動が中心となっている。この近況報告の内容からわかるように、ヒルシュマイヤー師は自分の宣教師であることを明確に意識して、南山大学での教育活動を宣教師の一環として見ていた。

南山大学での教育活動と宗教活動

一九六〇年代から南山大学はキャンパスの移転など、次第に拡大し発展してきたが、ヒルシユマイヤー師は、大学の発展について一九六二年のニュースレターの中に誇らしげに次のように述べている。「大学はこの数年間うまく行っていて、教育のレベルも評判も良くなりましたが、これから学生数も増やさなければならぬ。経済学部の中で経営学科と経済学の大学院を来年の復活祭までに設置して、これによって学生数を三〇〇人まで増やす予定です。」⁽⁴⁰⁾同様に、翌日のニュースレターの中に、大学が新しいキャンパスに移転して、経営学科と大学院の設置、学部の学生の増加についても触れている。「合計で学生数が二五〇〇人に増えましたが、その半分ぐらいは復活祭から新しい学科が設置された経済学部にも所属しています。大学院で修士と博士の学位を授与することができますようになりました。大家として知られている教員も数名採用されましたが、これで教員の中のカトリック信者の比重が少なくなりました。」⁽⁴¹⁾ここで、ヒルシユマイヤー師にとって、大学の拡大と発展と共に大学におけるカトリック大衆としての存在も関心事であることがわかる。

実は、南山大学のカトリック大学としての意味、宣教活動の場としての意味は、ニュースレターの近況報告のテーマとして良く取り上げられている。「我々の最新の計画の一つは、神言会の多治見修道院を利用して学生向けの合宿や講習会を行う企画です。信者でない学生を対象に夏休みに三回、三日間ずつのわかりやすい宗教的なテーマでの祝福が開催することがすでに決まりました。このような企画を正しい方法で進めて、継続的に実行できるように神の祝福があらまように。というのは、信仰を広める道具にならなければ、カトリック大学としては何の役に立たないからです。」⁽⁴²⁾これらの合宿の内容については、翌年の一九六三年の報告の中に詳述している。「学生たちは土曜日に一人の神父と共にそこに行って、日曜日の夜までゲームをしたり、歌を歌ったりして、とりわけ宗教についての

話を聞き、真夜中過ぎまで話し合います。日曜日の朝にミサがありますが、日本一の美しい歌ミサです。これはほとんどの学生にとって、キリスト教と最初の個人的な出会いになります。教室での授業は個人的な出会いと言えないからです。洗礼準備の勉強をする学生数が最近何倍も増えていて、今年の復活祭に洗礼を受けた人は初めて一〇人を超えて十四人もいました。⁽⁴³⁾」

ヒルシュマイヤー師自身も合宿に参加することがあったが、一九六六年のニュースレターの次のように感想を述べている。「そこで、自分がもう若くないことがわかりました。深夜まで学生たちと話し合い、畳の上で寝て、二、三時まで隣の部屋で人々が話し続けているのを聞き、ますますくたびれてしまいます。しかし、みなでゲームをしたり、キャンプファイヤーをしたりして、同時に大変楽しく、心の若返りとなります。⁽⁴⁴⁾」

ヒルシュマイヤー師にとって、もう一つの重要な活動として挙げられるのは、学生の海外旅行の付き添いであった。一九六八年の夏に一〇週間、三七人の学生をドイツ、イギリス、フランス、イタリア、スイス、オランダ、ベルギーに連れて行った。旅行中に各地の見物やホームステイのほかにも、教会でミサに参加したこともあった。「学生の中にカトリック信者は一人しかいなかったが、みんなで何度かミサに参加しました。我々の学生たちは、いわば『洗礼を受けていないキリスト者』といってもいいでしょう。(もちろん、洗礼を受けた『非キリスト者的な人も』います。)ローマで、正確に言えば、教皇の避暑用山荘カステル・ガンドルフォで、教皇謁見に参加することができ、我々の団体の三人は直接教皇と話すことができました。ちょうどこの日、ソ連軍のチェコスロバキア進駐のニュースが伝えられたので、学生たちにとって一生忘れられない一日となるでしょう。⁽⁴⁵⁾」

学生とのもう一つの接点は神言会が設置し管理していた、「ヨハネ館」という男子学生寮であった。南山大学に全国から学生を募集しやすくする目的もあったが、神言会会員が寮のスタッフとなつたので、宣教・司牧活動とし

て位置づけられていた。ヒルシユマイヤー師は一九六九年のニュースレターでその計画について、次のように述べている。「我々はずっと前から大規模な学生寮を建てる計画があるが、これから実現となるでしょう。一二〇名の男子学生を収容できる寮ですが、遠方からも学生を受け入れ、指導を与えるためです。神言会司祭三人も一緒に入居し、寮の運営と管理の責任を負い、重要な宣教活動となります。建設費の半分ぐらい（四〇パーセント）はドイツの司教団からもらい、残りは神言会の負担になりますが、我々の企画の中で非常に重要なものですから、各会員が協力して募金活動をする事になっていきます。私の分としては三万ドイツマルクを集めなければなりません、うまくいくでしょうか。」

南山大学はミッシヨンスクールとしてカリキュラムの中に宗教科目も当然あるが、ヒルシユマイヤー師自身は専門であった経済学を教えながら宗教科目も担当していた。当時の南山大学の宗教教育について次のように述べている。「最近、宗教科目のカリキュラムをさらに充実させました。学生は四年間を通して学期ごとになんらかな形で宗教のテーマを扱っている科目を履修しなければなりません、上級学年では幅の広い選択肢があります。合計一六の専門科目で純粹神学的な問題とともに、キリスト教と哲学・文学・経済学などの分野との関係が扱われています。私は来年、「キリスト教とマルクス主義における人間像」という講義を開講する予定です。」

一九七〇年、ヒルシユマイヤー師は夏休みを利用して学生を引率して長崎と五島列島へ旅行した。この旅行は同師にとって日本のカトリックの状況を直接に知る貴重な経験であったようである。「これは、日本のキリスト教のゆかりの地である長崎と五島列島への最初の旅でしたが、この地方、特に五島列島は本州の経済中心地である名古屋やその他の地方とくらべれば発展が遅れています。島の人々は貧しい漁師ですので、子供たちは一六歳の時から工場へ出稼ぎに行きます。この地方には全国のカトリック信者の人口の半分が住んでいます、今年神言神学院で

司祭に叙階された七人の司祭の中に六人もこの地方の出身者です。また、長崎は殉教者と原爆の地でもあります。長崎には神言会の小神学校、男子中学・高等学校、そして小教区があります。五島で学生たちと過ごしたこの早春の日々は、現実の世界よりも本から世界を学ぶことが多い『本の虫』の私にとって小さな喜びの一つに数えられます。⁴⁸

南山大学のキリスト教的な雰囲気はヒルシュマイヤー師にとって大事なことであつたので、大学の近くに神言会会員養成の場として建てられた神言神学院の建設を大いに歓迎して、大学のためにも存在の意味が大きいと考えていた。「新しい神学校の建設にも取り組んでいる。建物は大学の新しいキャンパスに建てられる予定ですが、大学にカトリック的な特色を与えるでしょう。」⁴⁹ヒルシュマイヤー師が一九六六年のニュースレターの報告の中に述べているように、この神言神学院の聖堂は大学生のためにも使うこともありました。「新しい神学院は、現代調でもきれいになりました。(中略)学生たちのためにも使えます。(中略)今まで学生のための聖堂がなかったのです。」⁵⁰

南山大学と神言会

南山大学での教育活動は、ヒルシュマイヤー師自身だけではなく、神言会の大きな共同活動でもあつたので、ニュースレターの報告の中に同師が神言会の日本管区の発展だけではなく、全世界の神言会の動きについての言及が多かつたことも当然であろう。一九五八年、まだアメリカ留学中のころ、神言会全体、特に日本の将来のために新しい会員の確保の問題について次のように述べている。「ドイツでは、危機感がまだあまりないかもしれませんが、アメリカとその他の宣教地では、大きな問題となっています。そういう意味で海外宣教の経験のある人が総会長に

選ばれたことと最近の総会でこれについて根本的な取り組みを決めたことは歓迎すべきです。総会長は一〇月に日本を訪問することになっていますが、解決しなければならぬ問題が多いです。日本管区所属会員の平均年齢は、神言会全体の平均年齢を一〇年も上回っていますので、若い会員がもつと必要です。」⁽⁵¹⁾

ヒルシュマイヤー師はここで具体的な問題について指摘していないが、一般的に言えば神言会日本管区がこのころ直面していた問題は南山大学をはじめ、南山学園の将来構想、特に大学の発展とそれに伴う資金調達と会員の配置、神言会の日本人の会員の養成、神言会が担当していた小教区などであった。⁽⁵²⁾ 実は、一九六二年、総会長ヨハネス・シュツテ (Johannes Schütte, 1913-1971) は一カ月の間日本管区を訪問し、いくつかの問題についての協議に参加した。ヒルシュマイヤー師が述べているように、その一つは南山大学のキャンパス移転についてであった。「過去もそうであったように現在でも、人事のレベルの問題なのか長期計画の問題なのか区別することが難しい問題が多いです。大学の新キャンパスへの移転は数百万もかかりますが、その費用を賄わなければなりません。いるだけ人数には、それぞれの意見がありますので、現場で最終的な決定が必要です。幸いに、飛行機の時代であって、この時代になかった総会長もいます。」⁽⁵³⁾

実は、ヒルシュマイヤー師は日本管区だけではなく神言会全体の将来構想と長期計画の立案に直接関わったこともあった。一九六八年の神言会総会では、全世界の神言会の現状を調べて把握した上、将来構想と長期計画の提案を提出するために「神言会実行点検委員会」の設置が決められた。一九七〇年三月、ヒルシュマイヤー師はこの委員会の日本・台湾の地域コーディネーターに任命され、ローマの近郊にあるネミで「総本部の関係者と共に二週間、神言会の自己点検評価をどのように実施すべきかについて協議しました。」⁽⁵⁴⁾

南山大学のミッションスクールというアイデンティティを重要視していたヒルシュマイヤー師にとって大学

の将来構想と神言会会員の役職者と教員としての配置も大きな関心事であった。将来についての心配については、一九七一年のニュースレターの中に次のように述べている。「南山大学は一流の大学に発展して、他の大学と同じように時事問題に悩んでいます。(中略)財政の面においても苦境に陥っていますが、大学の予算が大きすぎて、神言会はもう助けることができませんので、大学のほうで新しい財源を開発しなければなりません。それに関連して、学園全体(大学・短大・中学校・高等学校)のなかの神言会の位置づけについても見直しが必要です。日本人の会員は今の段階ではそう簡単に高級役職につくことができません。(高校ならできるかもしれませんが)。外国人の役職者に関しては、もう時代遅れです。結局は、大事なのは「神言会の大学」であるということではなく、むしろ、キリスト教的カトリック的な大学であり、教会にとって意味のある大学であるということです。」⁽⁵⁾

翌年のニュースレターの近況報告の中にも、同様に将来についての不安が見られる。「大学ではいくつかの新しい計画があります。しかし、特に大事なのは、南山大学をカトリックの大学としての性格を強化することです。そのため、学長が神言会会員でない場合でも、大学のカトリック的な性格が残るようにきちんとした組織を作ることが必要です。神言会は、もう数年前から南山学園に金銭的な援助はしていません。かえって、会員の給料として学園のほうからお金をもらっています。しかし、優秀な会員(日本人も外国人も共に)がもっと必要です。現在、神言会日本管区で総会を開いているところですが、これからどうなるのでしょうか。また今度の神言会の総会はこの方向に進むでしょうか。聖霊が力強く導いてくださるように願って、互いにお祈りしましょう。」⁽⁵⁾

大学紛争

一九六〇年代末から始まり、間もなく全国に広がった学生運動は、一九六九年から南山大学にも姿が現れた。南山大学においての学生運動は、学生自治権や授業料などの問題を巡って学生デモやストライキなどの事件で段々エスカレートして、一九六九年の二度の「学生委員会室占拠事件」、一九七一年の「沼澤学長監禁事件」も起こり、全部で三度にわたって機動隊の出動によって対応しなければならぬほど激しいものであった。⁽⁹⁾ ヒルシユマイヤー師自身は、学長補佐として沼澤学長と共に学長室に過激派の学生によって監禁状態になってしまった。その様子について、一九七一年七月のニューズレターの中に次のように詳細に述べている。「翌日、記憶に残る六月一六日に、一時から文学部と学長、大学執行部との会合が予定されていましたが、私たちは二時ごろから閉じ込められ、退室できなくなっていました。四時ごろ、学生たちは会議室に押しかけてきて学長を包囲してしまいました。かれは四時間ぐらい、動けないほど学生たちにとり囲まれていました。私は学長補佐として彼を助けようとして、身体的にも取っ組み合うことさえ余儀なくされました。沼澤神父はトイレに行くことは許されたが、必ず『抑留り』に戻ってくるという固い約束をさせられました。学生たちは彼にその場でいくつかの点において大幅で無理な譲渡をするように要求しました。四、五回も身体的な力を使って脱出の試みをしましたが、失敗に終わりました。沼澤神父はもともと健康状態がよくないが、医者は一回も来て診察した結果、生死に関わるほどの高血圧の疑いがあると判断しましたので、結局特別出動隊を呼ばざるを得ませんでした。その場で学生が二四人逮捕されましたが、残り慌てて姿を消しました。これで本格的な大騒ぎになりました。沼澤神父は入院しましたので、私が（今日まで）学長の代理となって、大学敷地を閉鎖（ロックアウト）して、授業を三日間休講措置を取らざるを得ませんでした。その間、学生たちと話し合いをするために、大学の管理職五人で学生二〇〇〇人を対象に説明会を開きましたが、

過激派から怒鳴りつけられました。翌日、私は一人で大教室で過激派の学生たちと五時間も『討論』をしました。(中略) 結局、全学集会が開かれて、幸いに『大学に対する無期限のストライキ』についての投票で学生の三分の二の割合で否決となりました。今、夏休みが始まりましたので、秋学期の小衝突に備えるための一息つく時間があります。若い教員たちのなかに『左寄り』の人もいますが、少なくとも教員の中で一体感を作ることが大事です。⁵⁸⁾

以上の記述からわかるように、ヒルシュマイヤー師は大学紛争の最前線に立っていたものとして、非常に困難な状況に直面していた。しかし、自ら監禁状態にされたヒルシュマイヤー師は、ある意味で学生が望んでいた改革に理解を示していたようである。実は、学生運動とほぼ同じころ、カトリック教会のなかにも改革運動が行われている時代でもあった。一九六二年一〇月から一九六四年一二月まで、教会の現代化、すなわち現代社会における教会の存在の意味を再理解し、伝統を守りながら必要な改革を進め現代社会に開かれた教会を目指した第二バチカン公会議が開かれた。その後、公会議の取り決めに従って、典礼の改革、聖職者・修道者の養成と生活の刷新、一般信徒の信仰生活の刷新の教会内の改革を始め、プロテスタント諸教会との教会合同運動、諸宗教との対話、社会正義の実現などの取り組みが導入された。前述の「学長監禁事件」の報告が掲載されていたニューズレターの中にヒルシュマイヤー師は、学生運動をカトリック教会内の改革に例えて次のように述べている。「この事件で私には一つのことばかりしました。このような『爆破班』がなければ、私たちは座して決して思い切った改革を決定しなかつたでしょう。しかし、これから生き残るためにそうしなければなりませんでした。二年前に似たような問題がありました。改革を導入するたびに『それでよくなった』と言わざるを得ません。残念ながらこのプロセスは破壊が伴うことが多いです。貴重なものまでも壊されてしまうことが多いので、教会においても革命は少しも楽しくありません。しかし、そうでなければ、基本的なことは何も決まらないでしょう。これは、精神を狂わせる『革命』

にうんざりしている一人の教育者の感想にすぎませんが……」⁽⁵⁹⁾」

Ⅲ 学長着任とその後の活動について

ヒルシユマイヤー師は、一九七二年度から南山大学学長に着任した。一九七三年七月のニューズレターに掲載されたヒルシユマイヤー師が書いた一九七二年一二月付の手紙の近況報告によれば、学長任命は予期しない驚きであったようである。というのは、次期大学長には神言会会員ではなく、日本人の一般信徒の教員がなることを期待していたからである。「昨年末、私たちの学長は一五年間も務めてきた学長職を三月を以て辞めたいと言い出しましたので、次期学長の選定を始めなければなりませんでした。協議のためにわざわざ神言会総本部関係者が一人来ました。日本の神言会会員としては、次期学長にカトリックの一般信徒がなるべきだと同意していましたが、事態はそれとは違う方向に展開しました。それは、理事会で南山のカトリックの性格を固めるためには神言会会員がまだしなければならぬ事が多いので、学長には神言会会員それも私がならなければならない、とまさにカトリックの信徒たちが主張したからです。結局、私はいやおうなしに引き受けなければなりませんでした。⁽⁶⁰⁾」

学長方針、宗教文化研究所、ロゴスセンター

同じニューズレターの中に、ヒルシユマイヤー師は学長方針と南山大学の長期計画について述べた。「私はさまざまな新聞のインタビュで、最優先課題として考えているのは南山大学のカトリック的な性格と国際性をさらに強化することだと主張しました。」また、もっと具体的にいくつかの計画を紹介したが、たとえば、将来の交流協

定の締結に向けて、海外の大学との新しい関係を作るために伊藤孝一先生を七週間のアメリカとヨーロッパへの出張を頼んだ。それから、キャンパス整備の計画として、四三〇〇人にまで増えた学生を収容するために新しい教室棟の建設計画も挙げた⁶⁴。

同時に、神言会の企画として挙げられたのは、後で「ロゴスセンター」と名付けられた学生向けの宗教活動のための施設の新築工事と、キリスト教を含め宗教と文化を学際的な視点から研究を進める場としての研究所の創設であった。ヒルシュマイヤー師は、後者について次のように述べている。「最も大きな企画は、『宗教文化研究所』の創設です。私は夏休みを利用してその下準備を進めました。若し研究者と経験豊かな学者たちがチームを組んで、宗教と文化の問題に取り組むことができる研究所を目指しています。このような問題を一つの特定の方向から、たとえば仏教研究を専門的に研究するだけではなく、様々な観点から（歴史、文学、芸術、哲学、人類学、神学、諸宗教学など）研究を進めることが目的です。ちなみに、研究所の最初の所長には、イエズス会士のデュモリン師が予定されています⁶⁵。」

また、ロゴスセンターに関しては一九七三年の秋に開館式が行われた。図書室、会議室、ステージ、静かな小聖堂などもあり、宗教活動をはじめ学生の様々な活動ができる場として神言会によって建てられ、神言会会員が住込み、運営と管理に当たっていたのである。ヒルシュマイヤー師自身は、学長になってから直接に宗教活動に参加できなくなってしまうので、ロゴスセンターの活動に大いに期待していたようである。「数年前までは私も学生の司牧活動に直接に携わっていたが、今は別の形で、例えば、総合計画を通じて、間接的にしかできません。若い神言会会員や名古屋教区所属の司祭たちが宣教司牧活動に一生懸命取り組んでいる姿を見ますと、本当にうれしく思います⁶⁶。」

ヒルシユマイヤー師は、学長になると忙しくなったのは当然のことであるが、一九七三年七月のニュースレターに掲載された、ヒルシユマイヤー師が一九七二年一二月付で書いた手紙からその日課の忙しさがうかがえる。「毎日朝早くから朝の祈り、ミサ、黙想を。朝食、その後ちよつと新聞を読んでから、八時一五分ごろ大学まで二〇分歩いていきます。掃除婦がまだ仕事ですが、私は仕事を始めます。他の教員と同じような授業数（九時間）を持っていますが、「その傍ら」大学全体を管理運営しなければなりません。様々な電話、お客様の接待、話し合い、会議などがあり、自分の研究から心を奪われて、時々落ち着きを失います。」それと同時に、外部の講演会によく招待され、新聞記事や学術論文や著書の執筆依頼も多かったようである。⁽⁶⁵⁾

一九七五年のニュースレターによれば、大学では長期計画に従って新築工事を進めていたが、ちよつどそのころ起きた「オイルショック」のため日本の経済が不景気となっていたので資金調達に苦労していた。「名古屋で募金活動を始めて、私も三三〇ぐらいの企業を訪問しました。それにもかかわらず、経済状況が良くないので、活動の実はそれほど大きくありません。」しかし、同じニュースレターの中に、待望の「宗教文化研究所」について一二月から開設する予定であり、「東アジアにおける宣教の活動と方針のために大いに役立つことを願っています。」⁽⁶⁶⁾という良い知らせもあった。

募金活動の困難は、一九七六年のニュースレターの近況報告からもわかる。ヒルシユマイヤー師は毎日一〇ないし一一の企業を訪問して、それを「荒療治」と言っているが、この苦労を通じて別の意味で成功することができたと述べた。「寄付を少し集めることができましたが、もう一つの大事な成果がありました。すなわち、こちらの財界の上層部と知合い合いになり、『南山大学学長として財界のリーダーたちと人脈を作るためにロータリークラブに加入してみないか』と誘われたということです。これで、日程にはもう一つの約束が加えられました。毎週月曜

日の昼のロータリークラブの集まりです。」⁽⁶⁶⁾

一九七七年七月のニュースレターに掲載された、ヒルシュマイヤー師が一九七六年一月に書いた近況報告の中にも、再びそのぎつしり詰まった日課について述べている。「管理職の他に普通の教員の仕事だけではなく、名古屋の上流社会人との「公的な仕事」もありますので、東奔西走しています。その上、一月から一四回も高等学校の校長や教員のための講演を行いました。毎回講演は九〇分で、参加者は三〇〇ないし三五〇人ぐらいでした。また、二回のテレビインタビュー、九編の専門誌の論文や一般雑誌の記事（教育や経済問題について）、さらに、発行部数四五〇万部もある毎日新聞の三カ月連載コラムも頼まりました。後者については、自分の好きなテーマを選んでいいということで、『人格と人間の尊厳』を題として一三の記事を執筆しました。比較的短い記事でしたので、要点を押さえて簡潔になるようかなり苦労しました。それでも面白かったです。」⁽⁶⁷⁾

司祭叙階二五周年記念

前述のように、同期生のニュースレターの主な目的は、一九五〇年度の司祭叙階者の交流と親睦を深め、互いに励まし合うことにあった。一九七五年は、ちょうど司祭叙階の二五周年記念に当たった。司祭叙階二五周年記念はすべての司祭にとって大事であるが、ヒルシュマイヤー師も決して例外ではなかった。一九七六年六月のニュースレターに掲載された、ヒルシュマイヤー師が一九七五年のクリスマスに書いた近況報告の中に、自分の司祭生活を振り返って反省しながら、非常に深い感想を述べている。「そこで、二五年間の司祭生活からたくさん思い出を体験しました。私が計画したことと正反対のことになってしまったことが多かったが、結局そのほうが良かったと思います。『完全な失敗』のように見えたことは、結局、好転しました。私は決して経済学の専門勉強の計画は

なかつたが、結局、なんと良いことになったでしょう。(中略)しかし、それは外面的なことに過ぎません。大事なのは神様と私との間の神秘的な関係です。この関係こそ今年で再び思い出して追体験できました。これから、自分で計画や予想もせず、神の言葉と秘跡の奉仕者として自分を神に委ねて生きて行こうと思えます。」⁽⁶⁸⁾

また、ヒルシユマイヤー師は毎週日曜日に聖霊病院内の聖霊修道院でミサを捧げることになっていたが、司祭叙階二五周年記念に当たってお祝いをしてくださったことに触れながら、この毎週のミサは彼にとってどれほど大きな意義を持っているのかについて述べている。「自分としては、あまり特別なことはしたくなかつたですが、私が六年前から毎日曜日ミサを捧げている聖霊会のシスターのことを考量に入れませんでした。シスターたちはあまりにも盛大なお祝いをしてくださったので、私は喜びでわれを忘れてしまったほどでした。とにかく、病院の日曜日司牧活動は私にとって、貴重な霊的オアシスです。毎日曜日の説教の準備で大学の世界以外のことについて考えなければならぬし、シスターたちの信心深さは、普段批判的かつ冷静でいなければならない私のようなものにとつて、とても良い刺激だからです。」⁽⁶⁹⁾

神言会の活動

南山学園の他に神言会はフィリピン、台湾、インドネシアなど、アジア各地にミッションスクールとして小学校、中学校、高等学校、大学をはじめ、神言会会員の養成のために各地に神学校も設置した。特にカトリック信徒が多いフィリピンには、神言会の神学生も多かった。ヒルシユマイヤー師は、一九七八年七月のニュースレターに掲載された、一九七七年一二月に書いた近況報告の中にフィリピンで開かれたアジアのカトリック大学学長の集まりの様子を描きながら、フィリピンの神言会の活気についても触れている。この報告からヒルシユマイヤー師がば大

学教育を神言会の宣教活動として位置づけていたと同時に、将来フィリピンから南山大学への神言会会員の派遣の可能性について考えていたことがわかる。「私たちはそれぞれの大学の活動を全世界の教会の宣教的な使命の視点から考えました。テーマは、『キリスト教思想と文化的・精神的対話の仲介者としてのカトリック大学』そして『社会の経済的・社会的発展にとってカトリック大学の意味』でした。私は前者のテーマについて発表をしました。この三日間の集まりの後、フィリピンのタガイタイ大神学校一六名のフィリピン人会員の司祭叙階式と初ミサに参加することができました。(中略) フィリピンの会員たちの熱意と前向きな雰囲気を見て、精神的にも元気づけられました。(中略) 南山大学では、留学生別科の日本語コースの二人分の奨学金を神言会のフィリピンの大神学校に提供しましたので、九月から二人のフィリピン人神学生がここにいます。うまく行けば、日本に残って神言神学院で日本人の神学生と一緒に神学の勉強を続けて、適切な専門勉強を修了してから南山大学で働くために派遣することができましょう。」⁷⁰⁾

一九七七年の秋、ヒルシュマイヤー師は神言会日本管区の代議員として他の二人の日本人会員代議員と共に、神言会のローマ総本部で同年十月四日から十一月二六日まで開かれた神言会総会に参加しました。神言会総会はその当時五年ごとに開催され、神言会会員が働いている世界各地から代議員が集まり総会長とその顧問会を選出するとともに、神言会の現状を把握した上、将来構想と長期計画について審議・決定する、神言会の最高の決議機関である。同じ総会に参加したニュースレターの編集者ドレンケルフォルト師によれば、ヒルシュマイヤー師は日本人の会員の通訳をしたり、会議中よく発言したりしていた。また、次回総会長の予備選挙の投票で、ヒルシュマイヤー師の名も候補者として挙げられたことにも触れている。⁷¹⁾

総会のためにローマで過ごしたこの七週間は、ヒルシュマイヤー師にとって神言会宣教師としての使命感や神言

会会員同士の連帯感を深めるとともに、学長の忙しい仕事の中のつかの間の休息でもあった。「この期間は私たちの修道会にとって重要な意味を持っているだけでなく、私にとっても祝福の日々でした。仕事から完全に離れて、ポケットに手帳もなく、責任もありませんでした。その上、世界各地から集まってきた一〇〇名以上の選ばれた少数の司祭・修道士と共同で生活しながら話し合いとお祈りをしましたが、このような兄弟的共同生活はめつたにないものでしょう。もちろん、話しているうちに興奮したこともあったとは言え、決して喧嘩するほどではなかった。希望に満ちたまじめな雰囲気でした。修道者としての宣教使命について、共同体について、貧しい人々との真の連帯について反省して、私たちの存在の源泉としての祈りの大切さを再確認できました。これらの反省はすべての話し合いと思いの中に入り込んで、私たちのなかに新しい力が湧いてきました。」

多忙な日課と健康状態

しかし、日本に帰ってきたヒルシユマイヤー師はすぐ学長の忙しい毎日の仕事を再開しなければならなかった。「ローマにいた時に、学長になってからここ六年の間に自分が『マネジャー』になってしまったことに気がつき、ちよつと不安になりました。落ち着いて授業の準備をすることも時間をかけて研究することも、ゆつくり考える暇もありません。(中略) 約束は増えて、仕事に急いでいます。その上、外部での仕事もたくさんあります。社交の場でのあいさつ、講演、新聞記事の執筆、等々です。」

これだけ多忙なスケジュールをこなすことは、当然、体に相当の負担がかかる。実は、前述したように、ヒルシユマイヤー師は一九五八年にアメリカに留学中、目の病気のために数カ月休んでいたのが勉強できなかったこともあり、一九六五年にも重病に患ったこともあった。一九六五年のニューズレターによれば、ヒルシユマイヤー師レ

ンサ球菌による感染症になってほぼ一年間の入院生活を余儀なくされた。「去年の六月からの一年間のうち、九月は入院していました。それは新記録と言ってもいいかもしれませんが、同時に悲しい記録です。まず日本で三月入院して生死の境をさまよって、ドイツに来て、ある専門家から別の専門家まであちらこちら行かされてしまいました。病気の原因と推定されるレンサ球菌を一扫して病気を直すかどうか、まだはつきりしません。日本で肝臓の治療を受けたとき、右の目の病気が再発しました。それがまだどれぐらいかかると、わかりません。いずれにせよ、現在病気がかなり快復したから、日本へ戻るために八月にドイツを出発する予定です。」⁽⁷⁴⁾

ヒルシュマイヤー師が学長になってから、また目の病気で患ったことがあった。一九七六年のニューズレターの近況報告の中に述べているように、今回は白内障になって、手術が必要になった。「先ほど『健康ではちきれそうです』と書いたが、実は、目の手術を受けなければなりませんでした。一八年前から左目の瞳孔は変化して、眼球の水晶体が次第に濁ってしまい白内障になりました。それを『刺して』もらいました。すなわち、水晶体をとってもらいました。(中略)手術はある程度まで好都合でした。というのは、ちょうどそのとき、名古屋での募金活動で大変忙しくて一息を入れることができたからです。」⁽⁷⁵⁾

また、一九七九年のニューズレターの中に述べているように、再び目の手術を受けなければならなかったが、今回は緑内障の手術であった。主治医から成功率は五〇パーセントで、手術しない場合、視力を失ってしまうことになると言われたヒルシュマイヤー師は不安であったが、手術はうまく行った。「結局、六週間の入院の結果、少しは良くなりましたが、これからもよくなる見込みです。もちろん、視力がかなり落ちていて、まだ薬を飲み続けなければなりません。」⁽⁷⁶⁾

同じニューズレターの中に、もう一つの病気についての報告があった。「南山大学前の坂道を登るとき、首を絞

めつける痛みがあったので、喉のどこがおかしいと思って、喉の薬を出してもらうために医者に見てもらいました。そしたら、医者は喉を全然見ないで、その代わりに心電図をとるように指示しました。そして、少し不平に『狭心症です。しかも、心筋梗塞の寸前です』と言われました。最初にお断りしておきますが、今はもう元気になって、最近の薬とクナイプ式自然療法が良く効き、奇跡をおもわせるような効果をもたらします。その他に神さまの働きがどこまで関係しているのかわかりませんが、心電図はもう正常であり、前と同じ調子で南山の『山』の道で学生たちを負い越していくことができるようになりました。」ヒルシュマイヤー師は健康を回復できたが、治療のために一九七八年の夏休みに予定していたブラジル、メキシコ、アメリカへの旅行を中止することにした。⁷⁷

一九八〇年七月のニュースレターに掲載された、ヒルシュマイヤー師が一九七九のクリスマスの前に書いた近況報告の中に述べているように、健康状態がよくて仕事も普通にしていた。「仕事に満ちていた一年、そしてその仕事に必要な健康にめぐまれた一年に対して感謝する十分な根拠があります。」この「仕事に満ちていた一年」の様子について、同じ報告の中に次の詳述している。「今年は九〇分の公演を四〇回ぐらい行ないました。(中略)『西ドイツと日本』という本も出しました。内容を秘書に日本語で書き取らせて、文言を少し直してもらいました。もちろんこの本がベストセラーになるとは思いませんでしたが、初版(初刷り一五〇〇〇部)が出て二〇日経ったところ、もう品切れとなりました。現在増刷されていますので、入手可能です。しかし、『あいにくなこと』⁷⁸で仕事が増えました。というのは、講演や新聞インタビュー等、さまざまな依頼が寄せられるからです。」⁷⁹

幸いに、ヒルシュマイヤー師はこの骨折れる仕事の忙しさの中の一休みも得ることもできた。それは、仕事と休暇・親戚訪問を兼ねて欧米の三カ月の海外旅行という形であったが、ボストンでハーバード大学での大学関係の仕事と旧友の訪問、ロンドン大学で一カ月の講演会、オックスフォード大学とケンブリッジ大学の訪問のついでに、

ドイツで久しぶりに五人の兄弟姉妹と再会することができたのである。ヒルシュマイヤー師はこの家族の集まりについて次のように述べている。「そしてドイツでまた大変喜ばしい行事がありました。シレジアに住んでいた一人の姉と一人の兄とそれぞれの家族が出国することができたので、盛大な親族会が開かれました。今回は兄弟の六人が再会できましたが、その中で私が一番下です。向こうにいるのは一番上の姉だけです⁽⁸⁰⁾。」「

一九八一年のニューズレターによれば、翌年も、ヒルシュマイヤー師にとって充実した、実りの多い一年であった。興味深いことに、同師は自分の日課について詳述しながら、仕事をこなせる秘訣を心の平穏と神の恵みに支えられているという信仰の中に見出している。「今年も充実した多忙な日々を送りましたが、仕事は取り組み方によって薬のようなものになれると思います。とにかく、今年の仕事は私の健康に決して害を及ぼさず、かえって薬の難関を切り抜けることができました。(中略) これらすべてのことができるのは、まさに神の恵みによるのです。一六年前に私の病気を診断した専門医たちは私を死んだものと諦めました時から、私は神の恵みによって余分の人を生きています。したがって、私は毎朝、新たな一日を神からのたまものと感謝しています。健康は、特に身に余る健康は、のらくらしたり、人生に多くのものを期待したりするためにはありません。私はこうした実りある人生を生きていくことができたのは、個人的な奇跡と考えています。(中略) 希望に生きるということは現在の先をみて、いつもより大きなものを求めて、私たちの未来である最も偉大な方に達するように努めることです。」「

南山アーカイブズに所蔵されているニューズレターは一九八一年七月付けの第三二号が最後であるが、ヒルシュマイヤー師は、一九八三年六月六日早朝の散歩の途中、心不全で突然死亡して六二年の人生を全うした。亡くなる

五ヶ月前に心筋梗塞を起こして、休養中であつたが、それまでに上述したような忙しい毎日を送っていたようである。経済学者・教育者として知られていた同師の死に対して国内外から追悼の言葉が寄せられ、神言会や南山学園の關係者をはじめカトリック教会、学問の世界、経済界などから二〇〇〇名の参列の下に盛大な葬儀が名古屋の南山教会で行われた。⁽⁸⁾

結び

今まで、一九五〇年八月にドイツ・ザンクトアウグステインの神言会の大神学校で共に司祭叙階を受けた三〇名の同期生のニュースレターに掲載されたヒルシュマイヤー師の三〇年間の活動についての近況報告を見てきた。同期生のニュースレターの主な目的は、一九五〇年度の司祭叙階者の交流と親睦を深め、互いに励まし支え合うことであつたので、同期生の毎年の近況報告はヒルシュマイヤー師にとって一つの励ましと同時に、自分の日ごろの生活と活動について反省し、司祭と宣教師としての決意を新たにする契機でもあつたと思われる。

このニュースレターに掲載されたヒルシュマイヤー師の近況報告の内容からもわかるように、同師は最初から宣教師としての自覚が強く、日本での将来の活動の準備として本語学習やアメリカの留学の忙しい中、教会などでの司牧活動を続けた。また、宗教と直接関係ない経済学の勉強は宣教師としての将来の仕事の意義についてもよく考えていたと言える。本人は勉強ばかりでは視野が狭くなるだけでなく、司祭や宣教師としての意識が薄くなつていくことを心配していたようである。また、留学中の司牧活動を通じて、アメリカ社会における人種差別の問題や大量移民による文化的多様性について学ぶことができた。

専門勉強を修了し博士学位を取得して再来日したヒルシュマイヤー師は、宣教師としての本格的な活動を始める

と、同様な宣教師としての意識が強かった。南山大学での授業や研究で忙しくなっても、自分の活動を間接的であっても最終的に宣教活動と考えていたから、合宿と旅行で学生たちと過ごす時間も大事にしていた。同様に、南山大学学長として、大学のカトリック的な性格と国際性の強化と、学生の宗教活動の場として「ロゴスセンター」と宗教を学際的な研究拠点として「宗教研究センター」の創設を優先課題としたことも、ヒルシュマイヤー師の宣教師としての強い意識の表れでもある。

ヒルシュマイヤー師は、学界だけではなく研究者と教育者として知られていると同時に経済界と地域社会でも日本のビジネス、教育、社会の解説者として有名になり、学術論文や本、一般向きの新聞・雑誌記事の執筆、そして講演会講師の依頼が段々増えてきた。こうした多忙な生活の支えとして、自分の司祭・宣教師としての自覚と祈りが大きな役割を果たしたのである。

そういう意味で、本稿で見てきた同期生ニュースレターは、研究者、学者、教育者として知られているヨハネス・ヒルシュマイヤーの人生と活動をもう一つの側面、すなわち、宣教師としての強い意識を持っている視点から見て、同師の全体像を肉付けしてより完全に理解するために貴重な史料ではないであろうか。

註

(1) プロジェクトの主な目的は、日本経営史の学者としてのヒルシュマイヤー師の業績の再評価することであり、最初はその著作を「経営史の論集」と「南山学園史料集」という形で二〇一三年の終わりの刊行を目指していたが、最終的

には著作集の刊行ばかりではなく、大規模の刊行記念シンポジウムが開催されるに至ったのである。ヒルシュマイヤー師の著作集については、『工業化と企業家精神』（ヨハネス・ヒルシュマイヤー著 川崎勝「ほか」編 『工業化と企業家精

- 神』日本経済評論社 二〇一四年を参照。記念シンポジウムは二〇一四年六月二日に南山大学で開催された(岡部桂史・奥田太郎 編 『ヒルシュマイヤー著者集刊行記念シンポジウム二〇一四年講演録「工業化と企業家精神——ヨハネス・ヒルシュマイヤーの時代——』南山学会 二〇一五年三月)を参照)。さらに、南山アーカイブズとしては、『工業化と企業家精神』という「経済経営史編」に続く「教育編」というヒルシュマイヤー師の南山大学学長の立場から大学の運営、教育の実践、大学の歴史、日本の教育などについての第二の著作集として、『南山学園史料集 10 「ヒルシュマイヤー著作集 教育論』が二〇十五年三月に刊行された。
- (2) Willy Kraus, Erhard Louven (Hrsg.), *Johannes Hirschmeier. Die Japanische Unernehmung: Schriften aus dem Nachlaß. Eine Veröffentlichung des Instituts für Asienkunde Hamburg*, 1986 [「ヒルシュマイヤー師著作集。日本の企業・遺稿からの文書」。これは、ヒルシュマイヤー師の協力者の一人であった南山大学名誉経済学博士ウィリー・クラウス (Willy Kraus) によって編集されたものである。
- (3) 南山アーカイブズ所蔵、15-1 ヒルシュマイヤー学長、15-2 ヒルシュマイヤー学長、15-3 ヒルシュマイヤー学長、15-5 ヒルシュマイヤー学長。
- (4) *10 000 Meilen der Sonne entgegen* 「太陽に向かって万理の旅」、ドイツ語タイプライター打ちA4用紙二七枚、南山アーカイブズ所蔵、ヒルシュマイヤー学長 15-2 Dokumente, Privates (5) 『アルケイア』記録・情報・歴史」南山アーカイブズ 第三号 「10 000 Meilen der Sonne entgegen」太陽に向かって万里の旅——南山大学第三代学長ヨハネス・ヒルシュマイヤー師の来日旅行談」について——」二〇一八年一月、四五～七九頁
- (6) *Klassenrundbrief des Wehkekurses 1950* 「一九五〇年司祭叙階同期生ニュースレター」南山学園史料室所蔵、ヒルシュマイヤー学長 15-4 *Klassenrundbriefe*。ヒルシュマイヤー師の記載分は、毎回ドイツ語タイプライター打ちA4用紙の一、二枚程度、全部でタイプライター打ち約四〇枚がある。
- (7) *Klassenrundbrief des Wehkekurses 1950*, Nr. 1 「一九五〇年司祭叙階同期生ニュースレター第一号」一九五一年七月、一頁、南山アーカイブズ「15-4 *Klassenrundbriefe*」(封筒番号 2009-08-26-035-01)。以下、「*Klassenrundbrief*」と省略する。
- (8) 2. *Klassenrundbrief* 一九五一年二月、二頁、南山アーカイブズ「15-4 *Klassenrundbriefe*」(封筒番号 2009-08-26-035-02)
- (9) 5. *Klassenrundbrief* 一九五三年七月、七頁、南山アーカイブズ「15-4 *Klassenrundbriefe*」(封筒番号 2009-08-26-035-04)
- (10) 同上、六頁。
- (11) 6. *Klassenrundbrief* 一九五四年七月、一〇頁、南山アーカイブズ

- ブズ
- 「15-4 Klassenrundbrief」(封筒番号 2009-08-26-035-05)。
- (12) 5. Klassenrundbrief 一九五三年七月、六頁、南山アーカイブズ「15-4 Klassenrundbrief」(封筒番号 2009-08-26-035-04)。
- (13) 同上。
- (14) 同上、七頁。
- (15) 6. Klassenrundbrief 一九五四年七月、(封筒番号 2009-08-26-035-05)。
- (16) 5. Klassenrundbrief 一九五三年七月、六頁、南山アーカイブズ「15-4 Klassenrundbrief」(封筒番号 2009-08-26-035-04)。ヒルシュマイヤー師の他に二人というのは、ヒルシュマイヤー師と一九五二年に同じ船で来日したハンガリー生まれのフランツ・トルッケンブロード (Franz Truckenbrod, S.V.D.) 一九二三年～二〇〇七。同師は長崎南山学 高等学・中学校長、南山高等学・中学校長を歴任、長崎西町教会での宣教師牧に従事していた。) とオランダ生まれのヨハネス・ウマンズ (Joannes Umans, S.V.D. 一九二六年～二〇一五。主に名古屋の膳棚教会や南山教会、東京の吉祥寺教会や東光庵(瞑想の家)における宣教師牧に従事していた。) であった。
- (17) 6. Klassenrundbrief 一九五四年七月、一〇頁(封筒番号 2009-08-26-035-05)。
- (18) 同上。
- (19) Rundbrief "Liebe Freunde" Washington, 15 September 1955, 1頁。(封筒番号 2009-08-26-035-32)。
- (20) 7. Klassenrundbrief 一九五五年七月、一二頁(封筒番号 2009-08-26-035-06)。
- (21) 同上、一三頁。
- (22) 同上、一四頁。
- (23) Rundbrief "Liebe Freunde," Washington, 15 September 1955, 四頁。(封筒番号 2009-08-26-035-07)。
- (24) 8. Klassenrundbrief 一九五六年七月、九頁(封筒番号 2009-08-26-035-07)。
- (25) 同上、九頁。
- (26) Rundbrief "Liebe Freunde," Washington, 15 September 1955, 11頁。(封筒番号 2009-08-26-035-32)。
- (27) 同上、二頁。
- (28) 同上、三頁。
- (29) 同上、三頁。
- (30) Rundbrief "Liebe Freunde," Miramar, 27 June 1956, 三頁。南山アーカイブズ「15-4 Klassenrundbrief」(封筒番号 2009-08-26-035-33)。
- (31) 同上、三～四頁。
- (32) Rundbrief "Liebe Freunde," Washington, 15 September 1955, 三頁。

- (33) Rundbrief "Liebe Freunde," Miramar, 27. June 1956, 11頁。
 - 08 - 26 - 035 - 13)。
- (34) 9. Klassenrundbrief 一九五七年七月、十一頁、(封筒番号 2009 - 08 - 26 - 035 - 08)。
- (35) 10. Klassenrundbrief 一九五八年七月、十二頁、(封筒番号 2009 - 08 - 26 - 035 - 09)。
- (36) 12. Klassenrundbrief 一九五六〇七月、十三頁、(封筒番号 2009 - 08 - 26 - 035 - 10)。
- (37) 13. Klassenrundbrief 一九六一年七月、十頁、(封筒番号 2009 - 08 - 26 - 035 - 11)。
- (38) 同上。
- (39) Johannes Hirschmeier, *The Origins of Entrepreneurship in Meiji Japan*. Harvard University Press, 1964. J. ヒルシュマイア著土屋喬雄 由井常彦訳『日本における企業者精神の生成』東洋経済新報社 一九六五年。
- (40) 14. Klassenrundbrief 一九六二年七月、十一頁、(封筒番号 2009 - 08 - 26 - 035 - 12)。
 ニュースレターの番号には、「第14号」が重複しているが、日付がそれぞれ違い、内容も異なるものである。
- (41) 14. Klassenrundbrief 一九六三年七月、九頁、(封筒番号 2009 - 08 - 26 - 035 - 13)。
- (42) 14. Klassenrundbrief 一九六二年七月、十一頁、(封筒番号 2009 - 08 - 26 - 035 - 12)。
- (43) 14. Klassenrundbrief 一九六三年七月、九頁、(封筒番号 2009 - 08 - 26 - 035 - 13)。
- (44) 17. Klassenrundbrief 一九六六年六月、十四頁、(封筒番号 2009 - 08 - 26 - 035 - 16)。
- (45) 20. Klassenrundbrief 一九六九年七月、八、九頁、(封筒番号 2009 - 08 - 26 - 035 - 19)。
- (46) 同上、九頁。
- (47) 同上。
- (48) 22. Klassenrundbrief 一九七一年七月、九頁、(封筒番号 2009 - 08 - 26 - 034 - 20)。
- (49) 14. Klassenrundbrief 一九六三年七月、九頁、(封筒番号 2009 - 08 - 26 - 035 - 13)。
- (50) 17. Klassenrundbrief 一九六六年七月、十四頁、(封筒番号 2009 - 08 - 26 - 035 - 16)。
- (51) 10. Klassenrundbrief 一九五八年七月、十二頁、(封筒番号 2009 - 08 - 26 - 035 - 09)。
- (52) 当時の神言会日本管区の状況については、神言修道会来日百周年記念誌編集委員会『神言修道会来日百周年記念誌』、二〇一五年、一〇七～一一〇頁を参照。
- (53) 14. Klassenrundbrief 一九六二年七月、十一頁、(封筒番号 2009 - 08 - 26 - 035 - 12)。
- (54) 22. Klassenrundbrief 一九七一年七月、九頁、(封筒番号 2009 - 08 - 26 - 034 - 20)。
- (55) 同上、十一頁。

- (56) 23. Klassenrundbrief 一九七二年七月、七頁、(封筒番号 2009-08-26-034-21)。
- (57) 南山大学五〇年史小委員会編『南山大学五〇年史』、南山大学、二〇〇一年、八六頁。大学紛争と大学の対応の詳細については、同上の八六〜一〇五頁を参照。
- (58) 22. Klassenrundbrief 一九七一年七月、十一頁、(封筒番号 2009-08-26-034-20)。
- (59) 同上。
- (60) 24. Klassenrundbrief 一九七三年六月、七頁、(封筒番号 2009-08-26-035-22)。
- (61) 同上。
- (62) 同上。
- (63) 25. Klassenrundbrief 一九七四年七月、九頁、(封筒番号 2009-08-26-035-23)。
- (64) 24. Klassenrundbrief 一九七三年六月、七頁、(封筒番号 2009-08-26-035-22)。
- (65) 26. Klassenrundbrief 一九七五年七月、七頁、(封筒番号 2009-08-26-035-24)。
- (66) 27. Klassenrundbrief 一九七六年六月、九頁、(封筒番号 2009-08-26-035-25)。
- (67) 28. Klassenrundbrief 一九七七年七月、十〜十一頁、(封筒番号 2009-08-26-034-27)。
- (68) 27. Klassenrundbrief 一九七六年六月、八頁、(封筒番号 2009-08-26-035-25)。
- (69) 同上。
- (70) 29. Klassenrundbrief 一九七七年七月、十頁、(封筒番号 2009-08-26-034-28)。
- (71) 同上、九頁。
- (72) 同上。
- (73) 同上。
- (74) 16. Klassenrundbrief 一九七七年七月、一〇頁、(封筒番号 2009-08-26-035-15)。
- (75) 28. Klassenrundbrief 一九七七年七月、十一頁、(封筒番号 2009-08-26-034-27)。
- (76) 30. Klassenrundbrief 一九七九年一月、十頁、(封筒番号 2009-08-26-034-29)。
- (77) 同上、十〜十一頁。
- (78) 31. Klassenrundbrief 一九七九年一月、七頁、(封筒番号 2009-08-26-034-30)。
- (79) 同上、八頁。
- (80) 同上。ヒルシュマイヤー師とその家族は、当時ドイツ領で第2次世界大戦後ポーランド領となった上シレジアの出身であったが。戦後、そこに住んでいた多くのドイツ系人は移住させられ、ヒルシュマイヤー師の母と親族の一部は西ドイツに住み着いた。
- (81) 32. Klassenrundbrief 一九八一年七月、七〜八頁、(封筒番号

2009 – 08 – 26 – 034 – 31)°

- (8) James Heisig, "In Memoriam: Johannes Hirschmeier, 1921-1983," *BULLETIN*, Nanzan Institute for Religion and Culture, No. 7, 1983, p. 20.

not only gave him encouraging news from his classmates, but also furnished him the opportunity to reflect on his own activities from the perspective of a missionary. Thus, he was conscious of himself as a missionary even as he pursued graduate studies in a non-theological subject in a non-religious atmosphere at Harvard University. In his activities at Nanzan University, even while becoming more and more engrossed in his academic research and teaching, he always considered it to be missionary activity, even if only indirectly. Furthermore, as his schedule became busier from work as president, scholar, and popular lecturer and commentator on Japanese society, he found his life of prayer and faith as a missionary to be an source of energy and sustenance.

This article thus fleshes out our understanding of Hirschmeier the man and missionary and gives us a deeper understanding of Hirschmeier the scholar, educator, and commentator on Japanese society.

Johannes Hirschmeier's Self-understanding as a Missionary as Described in the Newsletters of the St. Augustin Ordination Class of 1950

Richard SZIPPL

Abstract

Rev. Johannes Hirschmeier, S.V.D. (1921-1983), was the third president of Nanzan University, serving from 1972 until his sudden death from heart attack in 1983. The author of a pioneering study of the history of Japanese business, he was well-known not only as a scholar and educator but as a lecturer and commentator on contemporary Japanese society both in Japan and abroad. The present article is a follow-up to a previous article based on a unpublished German-language manuscript found among his personal papers held in the Nanzan Archives describing his two-month journey to Japan by rail and sea in May and June of 1952. That article gives us a glimpse of Hirschmeier as a young missionary at the beginning of his life's work in Japan. The present article continues the story of Hirschmeier's thirty-year long engagement with Japan. It is based on another set of his personal papers in the Nanzan Archives, a series of annual newsletters exchanged among his ordination classmates from 1951 to 1981.

The article is divided into three parts: The first covers the period from his first arrival in Japan, his Japanese language studies and graduate studies in economics at Catholic University and Harvard University. The second part focuses on his activities at Nanzan University until his appointment as President, while the third deals with his activities after assuming the office of president. The newsletters show that throughout his life as a graduate student in the USA and as a researcher and educator in Japan Hirschmeier remained conscious of being a missionary. The newsletters